

# 野菜

たまねぎ

早生種は1月中下旬が2回目の追肥の時期である。いずみの化成(8・8・8)で50~70kg/

早  
主

土を軟らかくし、肥大促進、品質向上を目的に、追肥時に中耕除草をする。その際、たまねぎの根はできるだけ切らないよう軽く行う。

中耕後に除草剤を使用する場合は表1の薬剤を使用する。土壤処理除草剤の散布は、土壤が乾燥していると効果が劣るので、適度に湿っている時に行う。

◆病害虫防除

◆ **病害虫防除**

べと病・白色疫病は、気候が温暖で雨が続くと発生しやすくなる。排水路を整え、過湿にならないように注意する。発生初期には表2の薬剤で防除を行う。



◆收穫 キヤベツ

1～2月は、松波を中心とした泉州キヤベツの収穫最盛期を迎える。収穫が遅れると裂球するので、適期収穫に努める。

◆病害虫防治

雨による過湿条件が続くと菌核病が発生しやすいので、うね間の排水に注意するとともに、発生を認めたら、発病株をほ場の外に持ち出して処分する。葦剤防除については表3を参照し、適期防除に努める。



## 軟弱野菜の露地栽培

1月下旬から2月上旬は年間で最も寒い時期となる。凍害等

必要に応じて、霜よけや保温資材（寒冷紗、不織布）を活用する。（例①～③）

シネルがけ+不織布のべたがけ  
ただし、被覆すると中の様子  
が見えにくくなり、病害虫の発  
生等に気づくのが遅れることも  
多いため、注意する。

幼虫、蛹、成虫の密度を下げて  
おく。

## ◆越冬病害

◆越冬病害の防除

# 果樹

## ◆樹勢の回復

近年、果樹全般に樹勢が低下している樹が増えている。樹勢の低下している園では、たこつ

い。樹勢の回復を計画的に行うと良好施肥による下層土壤の改良や、客土・堆きゅう肥の施用により、

\* ハーベストオイルは、かんきつで登録がある。

## ◆中晩柑類の収穫と貯蔵

はつさく、ネーブル、清見、  
しらぬい  
不知火（デコポン）等の中晩柑  
類の完熟期は2～3月だが、袋  
かけ栽培をしないときは、凍害  
や寒風害による果皮障害の危険  
性がある。

そこで、被害を受ける前の1月上旬までに収穫貯蔵して追熟させる。収穫後は風乾して果実重量を3～4%程度減少させる予

◆園内清掃

病害虫の発生を抑えるため、落ちた果実や枝葉は、園外で処分し、園の病原菌や害虫の卵、



農薬の登録内容は頻繁に変更されます。農薬は最新情報を確認して使用しましょう。

最新情報は府・農の普及課、JA、Web版大阪府農作物病害虫防除指針 (<https://www.jppn.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html>) から。

農産物の病害虫発生予防については大阪府環境農林水産部農政室推進課病害虫防除グループ (<https://www.jppn.ne.jp/osaka/>)。

表1 たまねぎに登録がある主な除草剤

	薬剤名	HRACコード	10a当たりの農薬使用量	10a当たりの散布液量	使用方法	使用時期	使用回数
土壤処理剤	トレファノサイド乳剤	3	200~300ml/10a	100ℓ/10a	全面土壤散布	定植後 (ただし収穫75日前まで)	2回以内
	クロロIPC (クロロIPC乳剤)	23	200~300ml/10a	70~100ℓ/10a	全面土壤散布	定植活着後または中耕後 (ただし収穫30日前まで)	2回以内
	ゴーゴーサン乳剤30	3	300~500ml/10a	70~100ℓ/10a	全面土壤散布	定植後(雑草発生前) (ただし収穫60日前まで)	1回
茎葉処理剤	ホーネスト乳剤	1	75~100ml/10a	100~150ℓ/10a	雑草茎葉散布 または全面散布	雑草生育期 (イネ科雑草3~5葉期) (ただし収穫14日前まで)	2回
	セレクト乳剤	1	50~75ml/10a	100ℓ/10a	雑草茎葉散布 または全面散布	雑草生育期 (イネ科雑草3~5葉期) (ただし収穫21日前まで)	3回以内

※HRACコードが同一であれば、有効成分が異なっていても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。

表2 たまねぎの病害に登録がある農薬

薬剤名	FRACコード	病害名	希釈倍数	10a当たりの散布液量	使用時期	使用回数
リドミルゴールドMZ	M03, 4	べと病、白色疫病	500~1000倍	100~300ℓ/10a	収穫7日前まで	3回以内
ピシロックフロアブル	U17	べと病	1000倍	100~300ℓ/10a	収穫前日まで	3回以内

※FRACコードが同一であれば、有効成分が異なっていても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。

表3 キャベツの菌核病に登録がある農薬

薬剤名	FRACコード	希釈倍数	10a当たりの散布液量	使用時期	使用回数
ベンレート水和剤	1	2000倍	100~300ℓ/10a	収穫7日前まで	6回以内
ロブラー水和剤	2	1000倍	100~300ℓ/10a	収穫7日前まで	4回以内

※FRACコードが同一であれば、有効成分が異なっていても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。

措作業を行う。

なお、暖冬の時はみかんを含め腐敗果が多発しやすくなるので、貯蔵時には傷果がないか十分にチェックする。



## もも

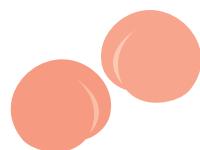
密植園では、日当たりを改善する意味で間伐を計画的に行う。また排水の悪い園では、溝切りや暗きょ排水等を行う。

### ◆土壤改良

もも園の土壤が中性近くからアルカリ性 (pH 6.5以上) になると、マンガン欠乏症が発生しやすく、生育不良や小玉果の原因になる。初期の症状は5月中旬頃から新梢の先端の葉色が薄くなり、葉の葉脈間の緑色が抜けて縮模様になる。

ももの根は、2月になると伸び始めるため、根を切る中耕や排水対策は1月中に行う。この時期は菌密度を下げて今年の発生を抑えるために、せん

孔細菌病に冒された枝 (春先は表皮が紫黒色に変色する) を切除し、園外に持ち出し処分する。また、生育期の風ずれによる傷口からの感染を防ぐため、防風ネットや防風垣を整備する。



## いちじく

せん定は2月下旬頃までに、前年の結果枝基部の芽が欠けていないことを確認し、1~2芽残すようにせん定をする。

残す芽のすぐ上で切ると切り口が乾燥して亀裂が出来やすく新梢の伸びが悪くなるので、残す芽の少し上で切る。

なお、若木で枝を長く残す場合は、登熟していない緑色の部は切り落とすようにする。

